関連学会印象記

第70回米国心臓協会（AHA）学術集会

野上昭彦*

第70回米国心臓協会（American Heart Association：AHA）の学術集会が，1997年11月9日より4日間フロリダ州オランドで開催された．この学会はご存じのとおり世界最大の心臓学会で，米国のみならず世界の心臓病学を牽引していると言っても過言ではない．今回の採択演題数は4286題であったが，その中身は心臓病学のすべてを網羅した内容であるためすべてを把握することは不可能である．実際，筆者は専門の不整脈以外のセッションには参加しなかったため，その他の内容については判っていない．本誌の読者の専門も多岐にわたっているため，ここで不整脈の演題の詳細を述べても無意味なことになると思われる．そこで本稿ではあえて演題の内容には触れずに，学術集会全体から受けた印象を述べることにする．

ここ数年の傾向であるが，基礎的な研究，特に分子生物学に関連した演題が目立ち，臨床研究的な演題は少なくなってきていたが，本年はその傾向に変化が認められた．全体的に分子生物学関連の演題数が若干減少し，臨床関係の演題が復活した．しかし，臨床研究でも内容は以前の傾向とは少し異なっているような印象を受けた．以前から米国の学会には米国民の切実な問題であり，また医療費抑制とも密接に関連している心臓リハビリテーション，コレステロール，食事療法などの演題が多かったが本年はさらにそれに関する演題が増えたようであった．日本の大きな医学会ではあり得ないことであるが，今回の学会の会長はM.D.（医師）ではなくR.N.（看護婦）であった．このことがpatient careあるいは予防医学関連の演題が増加したことにも影響していたのかもしれない．

他に今回のAHAで感じたことは医療産業と学会の関係がより密になっていると言うことであった．学術集会に付随して薬物・医療機器などの展示が併設され，展示企業が何かしらの寄付金を学会にもたらすことは，金額の大小の差はあっても日本とも同じである．今回のAHAで感じたことはさらに発表演題の内容にまで医療関連企業の思惑が影響している可能性である．筆者の知人の米国人医師は不整脈のあるセッションは明らかに某ペースメーカ企業の提供であると言っていた．この情報はあくまで噂にすぎないが，そう言われてみると今回の発表演題には（少なくとも不整脈関連演題では）新たに開発された機器による検査や治療に関するものが多いように思われた．米国でテレビ・ニュースを見ると判るように米国民の興味対象は政治・経済（株式）・医療・スポーツの四つであり，この学会でも医学機関の専用デスクがあり，報道機関に閲覧させるための演題内容抄録を発表者はあらかじめ提出させられている．また学会場の隅々で報道機関のインタビュウを受けている場面にも遭遇した．もしこれが新開発の機器に関する演題であったらどうなるであろうか．翌日にそのことが報道されるとそれはその企業の株価上昇に直結する．したがって企業にとって学会発表は重大な経済行動の一部となっているのである．また米国の大きな学会は米国内のベンチャー企業が世界各国の企業から投資を受けるための見本市あるいは交渉会場の役割も担っている．夜ともなるとホテルのバーなどでベンチャー企業と日本企業の会合がなされているのをしばしば目撃する．日本の某医療商社の人から私が聞いた話では，こういったベンチャー企業の中には投資を受けるとそれをみんなで山分けしてしまい，あとは開発中止ということで遁走してしまう悪徳企業もある

*群馬県立循環器病センター循環器内科

Presented by Medical*Online

そうである．だいぶ話がそれてしまったが，結局AHAでは医療関連企業の影響が強くなっているらしいと言うことである．

ここまで話を進めると医療関連企業の学会への参与は悪いことばかりかのように思われるかもしれないが，筆者は何もそうは思っていない．企業のスポンサーで学会前や学会中にいくつものサテライト・シンポジウムや講演会が催されていた．例えば筆者の病院からはレジデントの一人が某米国企業の提供する心臓電気生理学のセミナー・コースに参加した．これは心臓電気生理学の初心者用（心臓病フェローを終了しサブ・スペシャリティーとして心臓電気生理学を志すフェローが対象と思われる）に組まれた2日間にわたるコースである．講師は世界的に有名な一線の電気生理学者十数名であり，日本では夢のような講義である．このようなセミナーが無償で（もちろん旅費と宿泊費は自前であるが）受けられる．それを提供する企業側にもそれなりの皮算用はあるのかもしれないが，それにしても日本においてはこのように教育的な企業のスポンサーシップは乏しい．それだけではなく，今回のAHAには多数の企業スポンサーによるサテライト・シンポジウムが認められた．この数は以前と比して格段に増加しているように思えた．何しろその日の学会終了とともに連日学会場前には各企業の名前を付けたバスが並び，会場付近やリゾート近くのホテルの宴会場や小会議室には企業の看板が立ち並んだ．これはとても日本の学会では考えられない．特に昨今の医療スキャンダル後の過敏反応状態（例えば製薬会社MRからカレンダーや手帳ももらってはいけないなどという国立病院もある）ではあり得ない話である．さらに話が飛ぶが，いつも欧米の学会で知り合いのフランス人教授に会うと日本人医師が自費で海外の学会に参加しているのが信じられないと言う．自分たちはスポンサーがない限り海外の学会には出席しないそうである．そういう彼もれっきとした国立大学病院教授である．勤務医の生涯賃金がすでに一流企業や銀行よりも低くなった現在，熱意だけでこの日本人研究者たちの研究活動がいつまでつづけられるのであろうか．このままでは日本の研究は世界の水準から遅れてしまうに違いない．あまりに日本の勤務医たちは声が小さい気がしてならない．

以上，今回（1997年）のAHA総会に出席して感じたことを羅列してみました．はなはだ個人的な感想ばかりで申し訳ありませんでした．しかし，これこそ私の『学会印象記』であろうと思いますのでお許し願います．最後に今後とも独創的なアイデアで日本人研究者が世界の医学会でさらに活躍することを祈りこの印象記を終えたいと思います．

Presented by Medical*Online